

本居宣長の医学と国学

高橋正夫

本居宣長が、小児科の開業医でもあった事実は既によく知られている。にも拘わらず、医者・本居春庵と国学者・本居宣長との内面的な相互関係については、これまで余り重視されて来なかったのではないか。

一国の精神史のピークを形成する最も創造的な思想家が、反面、その七十余年の生涯を通じて、刀圭家としても揺ぎない実績を当代社会に示し得たとき、その最も平衡的且安定的な実生活の内部構造において、謂わば医・文両全の為の、何らの相互媒介的な生産関係を構成することが無かったとは到底考えられない。むしろ、医師・春庵の日々の医療経験から得た瑞々しい生命哲学と人間観は、常に思想家・本居宣長の、そのわが国古来の精神と国典解釈の為の生きた靈感となり、逆に国学者・本居宣長は、その浩瀚な学力と透徹した世界観によって、不断に世医・春庵に対

して、その日常的な患者診療のための確たる医哲学と高度な倫理感を与えることが出来たに違いないと考える方が順当であろう。

春庵・本居宣長はその医論の中で、疾病は本来医者や薬剤が治すのではなくて、元々患者（或いは人間）一般が生来具備している、その中なる「元氣」《タカ熙然タル一氣》が治すのであり、従って患者のその元氣を養護すること《養氣》こそ医の至道であると言っている。これは明らかに、往古以来の人間の経験の一大組織化ともいうべき東洋医学の深い知見に加えて、春庵・本居宣長の半生に亘る日本古道の研究と実地医療の経験を打ち重ねて到達した、彼自身の確信にみちた医の哲学に外ならない。少なくともそれは、分析的・実験的な近代医学から導き出された結論ではない。「氣」という本来極めて神秘的・超経験的な生命力は、到底それ自体、分析科学や実験科学の対象とはなり難いものだからである。だとすれば、今から凡そ二百数十年以前に、卓然として患者各人における「氣」の重視を説いて止まなかった春庵・本居宣長の、そのような経験医学の真理性に出会うとき、人は同時に卒然として例えば、

抑々迦徴は如此種々にして、貴きもあり賤きもあり強きもあり弱きもあり、大かた一むきに定めては論ひがたき物になむありける

というような「古事記伝」・「迦徴」論のあの有名な一節か、さもなければまた、

吉人袁余邇若牟疏禍津日之神乃心之須辨母須辨無佐

という「玉銚百首」の、あの人口に膾炙した一句を想起しないであらうか。春庵・本居宣長は、明らかに日常眼前の經驗的な患者一人一人の身体を通して、却って超經驗的な、謂わば人間存在一般の根底に生動する「熙然タル一氣」を看取し、日々それに向って深切なる祈りを捧げることこそ、自らの医学と国学の靈異なる「産靈」の成就に外ならないことを実感していたのである。

一般に「天」や「仏」が普遍的世界（超絶的一者）として立ち現われるのに対して、わが国古来の「神」を、飽迄もその特殊性・個性において把握し切ったところに、「国学の大成者」・本居宣長の類い稀れな獨創性があつたと考えられる。そしてそれこそ患者の一人一人を正にそれぞれ厄の神を背負った者（或いは病める神そのもの）と看

做すことによつて、心から神々に祈り、神々を和め祭りながら、日々その地域住民の診療と治病に献身し続けた春庵・本居宣長のまことの相に外ならず、語の最も純粹な意味での、日本古道の精神と医道との、限らない交響と統合の証でもあつたのである。

現代医学のアポリアは、その涯しない高度・特殊領域への専門化傾向の中で、却って顕在化しつつあるプライマリ・ケア（Primary Care）の貧困化にあらう。周知の如く、WHOが一九四七年の創設以来一貫して人類の健康養護の推進のために掲げた基調は、

- ① 患者中心 (Patient Centered)
- ② 地域要請 (Community Directed)
- ③ 包括医療 (Comprehensive Health Care)

の三点につぎる。だとすれば、

春庵・本居宣長の医学が、既に遠い江戸中期社会の環境下にあり乍ら、確乎として「治療ノ枢機」を「熙然タル一氣」の養護に見出し、患者・地域住民一般の食事・身体・精神の継続的且包括的な医療を、日々心をこめて実践したという事実の意味するものは、今日の医療状況に照しみる

とき、改めてその高度の先見性を認めざるを得ないのである。同時に又そのような医師・本居春庵の医学と実践の独自性が、その反面の国学者・本居宣長の深い思想性と世界に対する形而上的認識に依って支えられたものであった事実の確認は、改めて医（或いは医師）の原点とは何かの問題を現代に提起するものとして、重ねて重要な意義を有するものといわねばならない。

（杏林大学医学部倫理学研究室）

柚木太淳について

中野 操

柚木太淳は京都の医家で世に眼科を以て業とした。かねてから人体解剖に強い関心をもち寛政九年（一七九七）十月二日に男屍を解剖した。また眼球を精検して『眼科精義』を著した。尤大なる『京都の医学史』ではあるが、太淳についての記述は大変簡粗であるので、肖像、筆蹟、著書等によりその人物を描き出したいと思う。

（開業医）